

卒業論文

西京区の潜在的な地域資源の発掘と発信

2018年1月

京都経済短期大学 経営情報学科

今瀬政司ゼミナール

2回生 塚田 匠

卒業論文

西京区の潜在的地域資源の発掘と発信

京都経済短期大学 経営情報学科

今瀬政司ゼミナール

2回生 塚田 匠

目次

I	はじめに	1
II	西京区での調査研究と実践活動の概要	1
II-1	今瀬政司ゼミナールでの企画	1
II-2	調査方法	2
II-2-①	「西京ウォーキングマップ」を参考に現地調査した場所	2
II-2-②	「西京区民ふれあいまつり」への活動参加と調査	3
II-2-③	「ふらっと・西京」への活動参加と調査	3
III	西京区内の地区別調査結果	4
1	松尾コース	4
1-①	概要	4
1-②	嵐山はなぜ絶景なのか?	5
2	大原野コース①	5
2-①	概要	5
2-②	メインは「三鈷寺」	5
3	大原野コース②	6
4	西京区制 40 周年記念コース	6
4-①	概要	6
4-②	榎原廃寺跡史跡公園	7
4-③	榎原三ノ宮神社	7
5	大枝コース	7
5-①	概要	7

5-②	桂坂ニュータウン	7
5-③	洛西ニュータウン	8
5-④	竹の資料館	9
6	川岡コース	10
6-①	牛ヶ瀬春日神社	10
6-②	五社神社	10
6-③	楠 <small>くすのき</small> 赤手拭 <small>あかてぬぐい</small> 稻荷 <small>いなり</small> 大明神 <small>だいみょうじん</small>	10
IV	今後の西京区の地域づくりについての市民の意見	10
IV-1	西京区にフルーツパークを造ってはどうか?	11
IV-2	高齢者も子育てに関与してはいかがか?	11
IV-3	洛西ニュータウンの家賃を変えてみたら?	11
IV-4	障がい者にも労働の機会を	11
V	今後の西京区の地域づくりについての筆者の意見	12
V-1	西京区に存在する優れた潜在的地域資源	12
V-2	潜在的地域資源の発掘と認知度向上	12
V-3	西京区の潜在的地域資源の情報発信～筆者独自のホームページの開設～	13
VI	おわりに	13
	引用文献、参考文献、協力者	15

I はじめに

筆者は、京都市西京区の地域活性化に向けてさまざまな調査研究や実践活動を行ってきた。西京区の地域活性化に興味を持ったのは、自身のふるさとの京都府福知山市も似たような現状があるためである。また、ボランティア活動に一時（福知山市の災害ボランティアなど）参加したこともあり、なにか役に立つようなことをしてみたいと躍起になったからでもある。

西京区について調べ始めた当初は、「松尾大社や嵐山が有名。自然の絶景を強みにしている。かつては栄えていた「洛西ニュータウン」は少子高齢化が進み、今では居住者が減少傾向である。南区にある桂川駅近くの大型商業施設に客が流れて、西京区内の商業施設の買い物客の数が減少している。」などといったことを耳にした。「自然を強みにしている」ということは裏を返せば、人が来ないから開発にも手を出せないということになる。「少子高齢化」という点では福知山市でも、問題視されている。このように、筆者にとって西京区はふるさと福知山市と共通する点がいくつもあった。

ふるさとと似たような現状を目の当たりにしたため、筆者はそうした西京区の抱える問題の解決に何か役に立つことはないかと考えた。無論、自身の取り組みひとつで活性化されるとは思っていない。あくまで、協力ができたらいいと考えている。

II 西京区での調査研究と実践活動の概要

II-1 今瀬政司ゼミナールでの企画

京都経済短期大学の今瀬政司ゼミナールでは、「自治と協働による地域づくり」というテーマを基に、社会的能力向上を図ることを目的に個人あるいはチームで企画を立て、実行、反省を行う。形式は基本的に自由型。文献調査や現地調査、ヒアリング調査などの他に、情報誌や動画を作成する個人・チームもあれば、イベントを通じて地域との交流を行うチームもある。

筆者は企画書の立案を始めた当初は、「西京区の魅力を調べて、その内容を冊子にまとめて、西京区のイベントなどで配布、情報発信を行い地域活性化を図る」ということを考えていた。しかし、「その内容では大概どこもやっている」、「単なる自身の紀行文を纏め上げるだけになりかねない」と考えたことから、内容を一工夫することにした。例えば、地域の中に存在する趣のあるもの。小さな発見。また、その地域にしかないものなどを探り、それを情報発信しようと考えた。さらに、検討した結果、インターネットを利用することで、予算削減や期間短縮、発信の範囲が広がると考え、独自のホームページを作成し、発信することにしたのである。

企画書が完成したところで、筆者は2017年3月から、西京区の各地区を自らの足で

調査して回った。現地調査においては、西京区役所発行の「西京ウォーキングマップ」(2009年4月9日発行)などを参考にした。西京区は自然を強みにした地域ならば、歩いて訪れる方法が、もっとも適切だと考えたからである。

II-2 調査方法

調査方法としては、文献調査、現地調査、ヒアリング調査、西京区で開かれているイベントに参加しての参与観察である。

II-2-1 ① 「西京ウォーキングマップ」を参考に現地調査した場所 (2017年3月～2017年11月)

A. 「松尾コース」

2017年6月下旬:「嵐山」、「松尾大社」、「^{つきよみじんじや}月読神社」、「法輪寺」を訪れ、撮影、調査。

B. 「大原野コース」

2017年5月下旬:「大原野神社」や「^{しょうじじ}勝持寺」などの建造物の撮影、調査。

2017年6月上旬:「三鈷寺」を訪れて頂上から撮影、調査。「^{おおとし}大歳神社」、「八幡宮」を訪れ、撮影、調査。

C. 「西京区40周年コース」

2017年3月上旬:「^{かたざはら}檜原公園」や「天皇の杜古墳」などの史跡を撮影、調査。

2017年4月上旬:「京都経済短期大学」、「天皇の杜古墳」、「^{かたきはらはいじあと}檜原廃寺跡史跡公園」、を撮影、調査。

D. 「^{おおとし}大枝コース」

2017年3月中旬:「洛西ニュータウン」へ赴き、町並みや「福西遺跡古墳」を撮影、調査。

2017年5月中旬:「桂坂ニュータウン」の「桂坂野鳥遊園」、「桂坂公園」、「洛西ニュータウン」の「福西公園」などを訪れ、撮影、調査。

2017年6月中旬:「^{うわたりよう}宇波多稜」や「^{おおえりよう}大枝稜」などの古墳、「三宮神社」、「福西神社」



資料:京都市西京区役所「西京区の学区、地域紹介」

(2017年6月20日発行)

<http://www.city.kyoto.lg.jp/nisikyo/page/0000064072.html>

などの神社を訪れ、撮影、調査。

2017年9月中旬：「竹の資料館」を訪れ、竹の撮影、調査。

E. 「川岡コース」

2017年4月下旬：「本願寺西別院」や「稻荷大明神」など地域の歴史や伝説を物語る建造物の撮影、調査。

2017年5月上旬：「五社神社」や「牛ヶ瀬春日神社」を訪れ、撮影、調査。

Ⅱ-2-② 「西京区民ふれあいまつり」への活動参加と調査

2016年11月19日に開催された「西京区民ふれあいまつり」は、「洛西ニュータウン」の中心商業施設や区役所支所のそばで行われたまつりである。住民の催し物を中心に開催し、地域の人々を楽しませるだけでなく、西京区の良さをアピールすることも目的にしている。

筆者は、「西京区民ふれあいまつり」で「輪投げ、スーパーボールすくい」の屋台の手伝いをボランティア活動として行い、それを通じて西京区民の様子を確かめた。そこでは、家族連れの参加が多く、スタッフから、来場者まで笑って楽しんでいた様子があった。「西京区民ふれあいまつり」は西京区では最も大きなイベントの一つであり、住民同士の距離の近さや温かみを伺えた。

Ⅱ-2-③ 「ふらっと・西京」への活動参加と調査

「ふらっと・西京」とは、地域の人たちが集まり、テーマを自由に提案し、そのテーマに興味を持った者同士で話し合い、纏め上げた内容を発表するというもの。テーマも内容も基本的に自由で、もともとの趣旨は交流の場の提供である。ちなみに、筆者もそのイベントで話し合うテーマを提案したことがある。テーマは「どうしたら、西京区は活性化できるのか」。

話し合うテーマとしては、具体的な解決策らしいものは見出せなかったものの、地域の人々の考えを知ることができた。

以下は、「ふらっと・西京」で把握した西京区民の意見である。

1. 西京区は少子高齢化が進んでいる。日に日に地域が危機に瀕しているという事実を感じている。
2. 西京区は企業が少ない。1次、2次産業の活性化を目指すべき。
3. 西京区は犯罪の少なさや地域のつながりの強さは他区域に負けていない。
4. 京都市内で、西京区は地下鉄が唯一通っていない。計画はされたものの、その案は諸事情により延期され、いまだに不満を抱いている人もいる。
5. いまの状態でも居住環境としては、それほど問題ないとする住民もいる。

6. 交通の便にやや不満。バスの本数が少ないことにやや不満。ただ、阪急電鉄の桂駅が開設された点が救いだという。

筆者は、西京区民が地域活性化に力を入れていることや、人と人との“つながり”を大切にしており、住民同士で楽しんでいると考える。事実、少子高齢化などは西京区全体では問題はあるが、一部の地域では、子育てしやすい環境であるが故、少子化が見当たらないことや、犯罪率が他区域より低くなっている。

Ⅲ 西京区内の地区別調査結果

筆者は、「西京ウォーキングマップ」を基に西京区の各コースを訪れ、それぞれのコース内に存在する景色や、建造物、“小さな発見”を求め、調査した。以下は、筆者が各地区（コース）における特徴を簡潔に纏め上げた内容である。なお、コース名は「西京ウォーキングマップ」に記載された名称で表記する。



資料：京都市西京区役所『西京ウォーキングマップ
～地域の魅力再発見～』（2009年4月9日発行）
<http://www.city.kyoto.lg.jp/nisikyo/page/0000102402.html>

1 松尾コース

1-① 概要

有名な「天皇の杜古墳」や「嵐山」があるコースで、一休僧侶が誕生したといわれている「地藏院」や、聖徳太子の霊を祀ったといわれている「月読神社」など、観光地としてはもっとも訪れやすいコースといえる。

「天皇の杜古墳」は、文徳天皇の陵と伝えられており、墳丘長は約83メートルという京都市内で最大級の規模である。埴輪や葺石（古墳の墳兵に敷き詰めた石）も発掘されている。国の史跡に指定されており、史跡公園として開放されている。

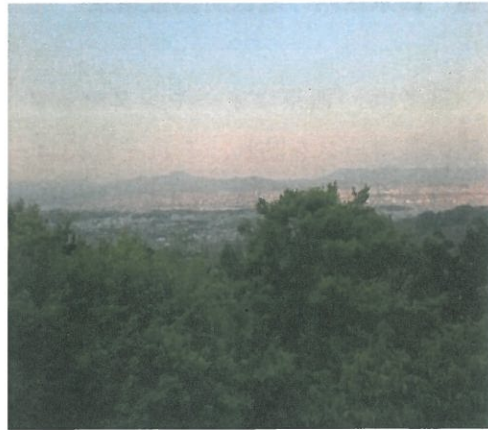
「松尾七社」の一つの「月読神社」があり、“安産守護の社”として広く知られている。その境内には神功皇后のゆかりの「月延石」があり、聖徳太子の霊を祀ったという「聖徳太子社」も置かれている。



写真：天皇の杜古墳（撮影：塚田 匠）

1-② 嵐山はなぜ絶景なのか？

嵐山は急斜面な山のため、角度的に絶景に見える。嵐山周辺には断層があり、その断層によって作られた「急斜面の森」と渡月橋などが建てられている「平地」の二つの異なる地形になっている。「プレート」によって断層ができ、本来地下に埋まっているはずの「チャート」という地層が現れ、急斜面を生み出した。急斜面の森と平地の観光地という違った地形を眺められるため、視覚的にダイナミックになる。大昔に嵐山に住んでいた人はその地形の違いを発見し、急斜面にもみじや桜などの木々を植え、「嵐山全体の美」を作り出したのである。



写真：「三鈷寺」からの景色（撮影：塚田 匠）

2 大原野コース①

2-① 概要

「大原野神社」から「大歳神社」までの大原野区域内的のコース。健脚を目的にしている

コースゆえ、道のりは「西京ウォーキングマップ」のコースのなかで最も距離が長い。「三鈷寺」は1074年、「西山国師」が念仏道場として発展させた寺で、京都市内の城陽、宇治を見渡せられる山頂に位置する寺である。西京区域内でもっとも絶景を見渡すことができるスポットといえる。

「大原野神社」は、桓武天皇が後の藤原おとむろ（奈良時代末期の皇妃）の氏神の奈良春日社の分霊を勧請して大原野を祀ったのが始まりという歴史がある神社である。京都市指定文化財に指定されている本殿をはじめ、「千眼桜」や「鹿の狛犬」など、個性的なものが置かれている。また、「八幡宮」には、北野天満宮になじみの「牛の像」も置かれている。



写真：「八幡宮」の牛の像（撮影：塚田 匠）

2-② メインは「三鈷寺」

このコースでは登山やウォーキングが楽しめるが、そのメインが「三鈷寺」である。自然を味わえ、かつ「大原野神社」や「三鈷寺」などの歴史に触れられ、山頂に聳え立

つスポットにたどり着く^{とどろこび}喜びが味わえる。京都市内の他の地域に存在する有名なスポットは、交通の便も整っており、容易にたどり着けるのが大概である。そうした中、西京区ではあえて、古き良き建造物や西京区の人々が誇りに思う景色を残し、訪れる人々に堪能させることができるという利点があると考ええる。

3 大原野コース②

「洛西ニュータウン」内の「大蛇ヶ池公園」^{だいじゃがいけこうえん}から、「榎本神社」^{えのちと}の近くのバス停までのコースである。

「大原野コース①」とは異なり、田園地帯や、その地域ならではの小さな“文化財”を見つけることができる。特に、都会暮らしに慣れている人々が訪れると、田舎まちならではの



写真：「大歳神社」(撮影：塚田 匠)

静かさと 360 度見渡す緑を堪能しながら地域資源を発見できるであろう。

例えば、文徳天皇の皇后「藤原明子」^{ふじわらのあきこ}の安産を祈願したことや、「在原業平」^{ありはらのなりひら}が隠れ住んだといわれている「十輪寺」^{じゅうりんじ}や、田園地帯の真ん中にある「大原野こども園」、多くの提灯が飾られていることが特徴の「大歳神社」などがある。

4 西京区制 40 周年記念コース

4-① 概要

「京都経済短期大学」から「京都大学桂キャンパス」までの「榎原地区」を囲うような形で歩いていくコースである。高台にある京都大学からは、西京区の景色を広く見渡すことができる。

榎原地区は昔、榎の木が多かったことが由来で命名された地区である。四条街道と通じ、梅津や桂、嵐山の木材湾港と通じる商業路だったことから、物流の要衝^{ようしゅう}の役割を担い、街道町として栄えた。幕末には志士を匿う豪商も多く存在したといった歴史を持つ地区である。

また、古墳や「榎原廃寺跡史跡公園」といった歴史を語るものや、桜の木々が並ぶ住宅街であることから、“自然を満喫しながら、町を歩けるところ”などを売りにしているコースである。

4-② 檜原廃寺跡史跡公園

「檜原廃寺跡史跡公園」は檜原地区の古代寺院跡で、国の史跡に登録されている公園である。平安時代中期に廃寺になったものの、廃寺跡の遺存状況が極めて良く、八角塔が検出されたことから、建築史上重要な寺院跡として国の史跡に登録された。(現在では、復元された八角塔を中心に周辺一体は史跡公園になっている。)

4-③ 檜原三ノ宮神社

「檜原三ノ宮神社」は「檜原廃寺跡史跡公園」の近くにある神社であり、境内に地名の由来になっている檜の木もある。「源頼光」が大枝山の酒呑童子を退治する際に、この地にあった小さな祠に供えてあった御神酒を飲ませて酔わせたという説がある。頼光の「武勇」と御神酒の「酒」、そして大枝山の「山」の神徳を称えるために社を造営したものである。



写真：「三ノ宮神社」(撮影：塚田 匠)

5 おおき大枝コース

5-① 概要

「桂坂ニュータウン」から「洛西ニュータウン」内の「竹の資料館」までのコースである。古くからの二つのニュータウンの特徴を見て回り、西京区の“住んでみたい”と思えるような町並みを眺めることや、高い場所から西京区の町並みを展望できるのが魅力的と言える。「桂坂ニュータウン」と「洛西ニュータウン」は、単なる住宅街ではなく、絶景地として挙げられている公園や開発前に発掘された古墳、あるいは、さまざまな竹林を眺められる。

5-② 桂坂ニュータウン

「桂坂ニュータウン」は大規模なニュータウンであり、商業施設や保育所（桂坂保育園）、小中学校（桂坂小学校、大枝中学校）などもある。「洛西ふれあいの里」という高齢者を預けられる福祉施設もあることから、広い世代の家族で居住が可能な環境といえる。

他にも、優雅に飛ぶ野鳥を眺められる「桂坂野鳥遊園」や、研究者の講演会を開催している「国際日本文化研究センター」もある。桂坂野鳥遊園では、工作教室も開かれており、登山コースもある（2017年10月25日現在、工事中）。居住にも、観光地としても、十分に魅力があるといえる。

5-③ 洛西ニュータウン

「洛西ニュータウン」は住宅から歩いて通える範囲に、行政施設、ホテル、商業施設、大規模なバスターミナルが備わっている。また、大きな病院も備えられているといった利便性も安全性も申し分ない。

また、「洛西ニュータウン」内には大きな公園が6箇所（大蛇ヶ池公園、新林池公園、福西公園、福西遺跡公園、^{もかいだに}境谷公園、小畑川公園）も存在している。特に「大蛇ヶ池公園」は、スポーツに適するほど広い公園で、その名のとおり、大きな池が園内にある。木々に囲まれた「大蛇ヶ池」と公園の周りの木々がマッチしていて、清涼感を生み出しているのが特徴である。



写真：「洛西ニュータウン」内の「福西古墳」（撮影：塚田 匠）

「福西古墳群」とよばれる群集墳がある。土器などの発掘調査後に遺跡も古墳も埋め戻されたが、「福西古墳」は「福西遺跡公園」としてニュータウン内に残るようになった。「洛西ニュータウン」が開発される前には「西林竹林」があり、筍の産出が盛んな農村地域であった。



写真：「大蛇ヶ池公園」（撮影：塚田 匠）

「洛西ニュータウン」では、少子高齢化の問題を抱えている。西京区役所の「洛西ニュータウンまちづくりビジョン」（2013年7月11日発行）においては、高齢者が安心して暮らせるようにすること、バリアフリー化を推進させること、「四季の自然を楽しめる町」と宣伝すること、ごみの減量、リサイクルの推進など、町や公園をきれいに保つようにすることが目指されている。

5-④ 竹の資料館

洛西ニュータウンの「竹の森公園」の中に、西京区の名物である「竹」についての知識を得られる「竹の資料館」がある。竹の種類から、竹の用途、竹の根の構造まで詳しく観ることが可能である。資料館の職員に竹に関する内容をじかに聞くことができ、知りたいことをより詳しく学べ、竹の工芸品（太鼓など）に触れられることなどから、竹ひとつで密度の



写真：「竹の資料館」にあるマダケ（撮影：塚田 匠）

濃い時間が過ごせる資料館といえる。「竹の資料館」内には110種類もの竹が展示されている。外見、生息地、性質もすべて異なり、また、竹についての“意外なこと”を知ることができる。そこで、筆者が「竹の資料館」で得られた竹の“意外なこと”についてまとめる。

A. 竹のさまざまな用途

竹は、観賞用や竹刀、箒などの工芸品の材料として使われている。工芸品の例としては、大分県の「別府竹細工」、奈良県の「高山茶筌」などがある。竹を火であぶり、脂分を落とし、緑色から黄色の竹に、独特の“模様”をあしらい、観賞用としても質の高い竹の製品を作っている。

B. 竹は命と生活を支える

竹は、ひとつの地下茎から次々と新しい竹を生やし、その生えた竹も地下茎から新たな竹を生み出す、ということを繰り返し、一面に広げる性質を持っている。一つ一つに“つながり”を持っており、その性質から地盤を強化させ、土砂災害から住民を守ることができる。また、竹は熱に強く変形しない材質から、鉄が普及していない時代には鉄の代わりに竹を用いたという歴史もある。橋や水道管にも竹を使っていた。そうしたことから竹は、住民の命と生活を支えてきたといえる。

C. 竹の意外な工芸品や用途

竹は、木の代用品としても用いられている。竹は木よりも頑丈で、熱に強く折れにくい性質から、箸や耳かき、印鑑などに使われている。竹で繊維を取り出して、服を作ったり、バイオエタノールとして燃料を精製したり、パルプにして紙を作るなど、竹の使

い道は幅広い。竹は木より早く成長できる植物ゆえ、今後も様々な用途への活用が期待される。

6 川岡コース

阪急電鉄の桂駅から洛西口駅までのコースである。西京区の歴史を物語る様々な建造物が存在している。たとえば、「泉の像」が特徴的な「牛ヶ瀬春日神社」や大きな鳥居が立つ「五社神社」などである。

6-① 牛ヶ瀬春日神社

「牛ヶ瀬春日神社」は、「牛ヶ瀬保育園」の隣にある小さな神社である。神社内には人間が鳥を掴んで手を天に向かって伸ばしている形の「泉の像」がある。「泉の像」は昔日に戦争で亡くなった人を弔うために建てられた。昭和のはじめまで「柳の清水」という湧き水があったことから、その名前がつけられた。像の形は、死者の魂が白鳥になり大空を飛ぶという伝説を基に作られたものである。「泉の像」の背景として、太平洋戦争中、戦場へ向かう際に当時の東海道線で向かったことが関係するといわれている。

6-② 五社神社

「五社神社」は平面技法や構造形式に独自性を持ち、保存状態が良かったことや、神社を囲む樹木も一体となって、優れた境内環境を形成している。そのことから、高い価値が認められ、京都市登録有形文化財に指定されている神社である。歴史的価値だけでなく、自然と調和させ、魅力的に彩らせるのは、西京区ならではと考える。

6-③ 楠 赤手拭稻荷大明神

楠赤手拭稻荷大明神は赤い屋根を葺いた小さな神社でJR東海道線のそばに建てられている。この神社は、鉄橋工事の際、多数の死者が出たことから、その死者を弔うためや、今後の安全を願うために建てられたものである。

IV 今後の西京区の地域づくりについての市民の意見

筆者は、西京区の現状や課題、今後のあり方について、市民の人たちにヒアリング調査を行った。市民の中には独自の考えを持ち、西京区の地域づくりに対して様々な思いや意見があるということを知ることができた。以下は、西京区のイベントの「ふらっと・西京」において、あるいは個別に協力を依頼して行ったヒアリング調査から得られた西京区の市民の主な意見をまとめたものである。

IV-1 西京区にフルーツパークを造ってはどうか？

「ふらっと・西京」において、「西京区に仕事をつくろう」というテーマが提示されて、他の参加者たちと議論を行った。そのひとつが、「西京区にフルーツパークを造ってはどうか」というものであった。「西京区には企業が少ない」、あるいは西京区の強みである「自然がいい」という地域性を反映させ、国道を走る車をターゲットにできるというものである。フルーツパークなら、西京区の特産物も販売でき、子供から大人まで幅広い客層が訪れてくれるであろうという考えからである。

IV-2 高齢者も子育てに関与してはいかがか？

少子高齢化に悩まされているからこそ、高齢者に協力を求めるのも手段だという考えからの意見である。高齢者であっても元気な人はいる。一昔前は三世代家族が当たり前であったが、現在では、「核家族化」が進んでおり、子育てにも影響を与えている。親の子育てに関する知識や経験が浅く、良い子育てにはなかなかたどり着けない。また、「待機児童」、「育児放棄（ネグレクト）」の問題も起こっている。女性の就職、社会進出が当たり前になっている現代社会においては、子育てに手が回らないのが現実ともいえる。

そうした時代だからこそ、上の世代の方々の力を借りるのが適切だといえよう。お金や時間に余裕のない状況においては保育園ではなく、地域に住む高齢者に預けるということを増やせないか。NPOとして、高齢者が母親の代わりに子育てに貢献するという団体を設立すれば、家族も大助かりするのではないか、という意見である。高齢化だからといって悲観することはない。むしろプラスに捉えることが重要である。子育てに関しては、人間でしか対応できないのが現実なのである。

IV-3 洛西ニュータウンの家賃を変えてみたら？

西京区の市民の方の話によると、洛西ニュータウン内の住宅の家賃はほとんど当初より変動がないという。家賃を安くして、住みやすさや病院をさらに整備すれば、在住者が増えるのではないかという意見もあった。あるいは、西京区には「京都市立芸術大学」、「京都大学桂キャンパス」、「京都経済短期大学」があり、そうした学生に「洛西ニュータウン」に住んでもらうと共に、各大学へのバスルートが整備されれば、若者が増えるのではないかといった意見もあった。

IV-4 障がい者にも労働の機会を

障がい者と健常者を分け隔てせず、むしろ障がい者の労働の門戸を広げることが重要だという。例えば、「日本理化学工業株式会社」（神奈川県川崎市）というチョークを製造している企業は、労働者の多くが障がい者である。経営者の才能次第で障がい者も労

働者として働ける。西京区の市民のなかには、「たとえ障がい者であろうと、他人に“障がい”になるような事をしなければ、その人は“障がい者”ではない」ことや、「障がいを持っている歌手が曲を出し、その曲が世間で認められれば、人気のシンガーになる」といった意見もあった。つまり、障がい者も企業などで活躍できれば、障がいなどというものは関係がないのである。

一般的に多くの企業は、障がい者を雇用したがるものではない。だからこそ、障がい者を受け入れる企業が西京区で増えれば、それだけ地域の社会的評価も高まると考える。それを可能にするために、障がい者を支援するための学校や施設の整備を充実させるべきだという意見もある。

V 今後の西京区の地域づくりについての筆者の意見

西京区について、文献調査、現地調査、ヒアリング調査、イベントでの参与観察を通して、現状と課題を把握した上で、今後の西京区の地域づくりのあり方として、筆者は以下のように考える。

V-1 西京区に存在する優れた潜在的な地域資源

西京区は、“自然の豊かさ”、地域の人の温かさ、住みやすさ、町を好きだと考えている市民が多い、ということが長所であると考えられる。観光地として名高い地区（京都市で言えば下京区など）と違い、「物足りない」と考える人がいるかもしれない。だが、西京区ではこれまで本稿で見てきたように、もともとあるものを大事にしており、それらの地域資源の価値は非常に高く、今後の地域づくりに活かせる可能性を持っている。

観光による地域づくりという点では、西京区には嵐山という有名な観光スポット以外にも、京都市の史跡として認められている古墳や城跡が区内各地に点在している。聖徳太子などの歴史上の偉人にゆかりのある建造物も多く存在している。観光地としても知られていないだけで他の地域と遜色がないことがうかがえる。さらに、京都市を一望できるスポットが区内にいくつもあることから、PRの仕方次第で自然美を目的に訪れる人々も誘致できるであろう。自然と歴史の風土を両方楽しめるという利点が西京区にあるのである。

V-2 潜在的な地域資源の発掘と認知度向上

筆者としては、西京区は“ありのままのもの”を大切にすることが重要だと考える。とはいえ、今のままでは、少子高齢化などの問題が解決せず、町は徐々に衰退していく恐れがあるとの不安を抱く市民も少なくない。今後のあり方として課題なのは、西京区の優れた地域資源についての人々の認知が足りないことである。目立つものばかりに目

を向けがちな人々に対する呼びかけが不足しているのではないかと考える。たとえ、西京区が「いいところ」といっても、知られなければ誰も訪れようとは思わないのである。

V-3 西京区の潜在的な地域資源の情報発信～筆者独自のホームページの開設～

そこで、筆者は西京区の良さを広く発信し、少しでも訪れる人を増加させるために、また、少しでも地域活性化につなげられるように独自のホームページを作成することにした。ホームページを閲覧する人が少しでも西京区に興味を持ってもらい、とにかくまず「行ってみたい」と考えた。また、その閲覧した人が別の人に情報発信をしてほしいとも考えた。西京区に新たに訪れる人を増やし、興味を持つ人を増やすことが今後の地域活性化に必要なことだと考えたのである。

ホームページの中身としては、全体的に筆者が実際に西京区の各地区を訪れ、各地区の景色や“小さな発見”を写真撮影して、できるだけ多く掲載した。そのままでは単なる個人的なホームページとして片付けられ、興味を持っていただけない恐れがある。そのため、筆者は、長々とした説明は省略し、内容も簡潔にして、文字や写真も見やすくするなどの中身の工夫を凝らし、ほかのホームページにはないオリジナリティを強調した。



資料: ホームページ「ねえ、“西京区”ってどこだか知ってる？」のホーム画面

以下は筆者が作成したホームページである。

■ ホームページ名: 「ねえ、“西京区”ってどこだか知ってる？」

(作成・発行: 塚田 匠)

URL <https://arashiyama-kyoto.jimdo.com/>

VI おわりに

どの地域にも、歴史はあり、長所もあり、人を感動させられるものはいくらでもある。だが、どんなに自身が良いと思っても伝えようと努力しなければ伝わらない。一般的に知られているものばかりでなく、“小さなもの”、“その地域にしかない個性的なもの”に

惹かれる人はいると考える。知ってもらおうということは容易くはないが、そうしたことの努力は避けて通れないと筆者は考える。筆者独自のホームページの作成では、自身の実体験と感想を盛り込み、“差別化”を図り、西京区の地域に興味を持ってもらえるように努めた。いわば、“はじめの一步”という位置づけにして、実際の光景は足を運んでみてほしいというものである。

まちを大切にしたい、あるいは活性化したいと西京区の人々は述べる。なぜかというところ、「自分の住んでいるところが好きだから」と語った。自分の住んでいる地域が好きにならなければ、活性化させる意味がない。町は生き残れない。地域に魅力があるかないかは、他人だけでなく、地域の人自らが認めて発見し、埋もれた魅力を引き出すことが重要である。

地域活性化に力を入れているのは西京区だけではない。全国各地において、「町が消える」といった問題を抱えている地域がある。その都度その都度、特産物の宣伝・PRを行ったり、町おこしのためのイベントを催すなど、あれやこれや戦略を変えていって地域の維持を図る。そういったことも大切なかもしれない。しかし、多くの場合は一時のブームで終わり、記憶から消えていく。地域は地域の人に愛され、地域に共感したり、事情があって住む人が地域の価値を認めてこそ、町おこしなのではないかと筆者は考える。地域活性化を考えるにあたっては、「地域をどうしたら好きになってもらえるか」といった原点に回帰してみてはどうであろうか。あの手この手のやり方では、催し物などが目的になり、それでは本末転倒である。共感してもらえる人に来てもらうのが一番である。そうした“共感”させる潜在的な地域資源を掘り起こして、それらの情報を広く発信してみることも戦略の一つだと考える。

引用文献

京都市西京区役所（2009年4月9日発行）『地域の魅力再発見～西京ウォーキングマップ』
<http://www.city.kyoto.lg.jp/nisikyo/page/0000102402.html>

参考文献

1. 京都市西京区役所公式ホームページ <http://www.city.kyoto.lg.jp/nisikyo/>
2. 京都市西京区役所（2013年7月11日発行）「洛西ニュータウンまちづくりビジョンを策定 概要版」
<http://www.city.kyoto.lg.jp/nisikyo/page/0000152248.html>
3. NHK 2016年4月30日放送 「ブラタモリ 京都・嵐山！嵐山はなぜ美しい？」
4. 京都市洛西竹林公園 「竹の資料館」資料

協力者

1. 京都市文化市民局 地域自治推進室 まちづくりアドバイザー 田尾 純子
2. 京都市西京区役所 地域力推進室 まちづくり推進担当 栢田 直人
3. 京都市西京区役所 地域力推進室 総務・防災担当 瀧 哲也
4. 京都市西京区役所 地域力推進室 企画係長 石井 和宏
5. 京都市西京区自治連合会 会長 小石 玖三
6. 京都市西京区「ふらっと・西京」参加者
7. 京都市西京区の住民の方々